

—鹿足地区中山間総合整備事業に伴う発掘調査報告書—

柿木田遺跡



2001年3月

島根県日原町教育委員会

鹿足地区中山間総合整備事業に伴う発掘調査報告書

柿木田遺跡

2001年3月

島根県日原町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、日原町教育委員会が平成11年度に行った鹿足地区中山間地域総合整備事業に伴う、柿木田遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化財課				
	山口大学人文学部教授	中村友博			
	元島根大学法文学部教授	田中義昭			
事務局	日原町教育委員会教育長	大庭耕助			
	日原町教育委員会次長	石川愛子			
	日原町教育委員会主幹	豊田肇			
調査員	日原町教育委員会主事	中井将胤			
調査補助員		清水留美子			
調査参加者	山田頼之　大庭学　大井将正　大庭和雄　河良権二				
	久保政幸　安野堅　大岡幸子　村上栄太郎				

3. 発掘調査に際しては、益田農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また山口大学人文学部の中村友博教授や元島根大学法文学部教授の田中義昭氏からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の安野進氏をはじめとし、地元の方々にご協力とご理解を得るなど、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構—P、土坑—SK、特殊遺構—SXと略号している。なお現場あるいは編集に利用した現地地図は、日原土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用した。なお現地における標高測量は、株式会社ワールドの協力を得て行った。

なお、編集にあたっては、山田頼之・清水留美子氏らが携わり、作図・トレースは福原恭子氏が行った。執筆は田中義昭・上原香里・細田美樹氏、そして中井将胤が各担当し、編集は中井将胤が行った。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過.....	(中井 将胤)	1
第1節 発掘調査の経緯.....		1
第2節 発掘調査の経過.....		1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境.....		2
第1節 遺跡の位置.....	(中井 将胤)	2
第2節 歴史的環境.....	(山田 頼之)	2
第3章 調査の概要.....	(中井 将胤)	4
第1節 遺跡の地形的立地.....		4
第2節 調査区設定.....		7
第3節 層序と層位.....		7
1. A・B区の層序状況.....		7
2. 本調査区の層序状況.....		8
第4節 遺構.....		11
1. はじめに.....		11
2. ピットと配石遺構.....		11
第4章 出土遺物.....		13
第1節 はじめに.....	(中井 将胤)	13
第2節 実測遺物.....		13
1. 土器類.....	(田中 義昭・細田 美樹)	13
2. 石器類.....	(上原 香里)	19
第5章 小 結.....	(中井 将胤)	21

挿図・図表目次

第1図 位置図	2
第2図 位置と周辺の遺跡分布図	3
第3図 地形断面図	4
第4図 遺跡配置図	5~6
第5図 調査地区名図	7
第6図 土層図	9
第7図 遺構指示図	10
第8図 遺構断面図（ピット）	11
第9図 SX01配石遺構図	12
第10図 遺物分布図	15~16
第11図 土器類実測図（1）	18
第12図 土器類実測図（2）	19
第13図 石器類実測図	20
第1表 出土遺物観察表1（土器類）	14
第2表 出土遺物観察表2（土器類）	17
第3表 出土遺物観察表3（石器類）	20

挿図・図表目次

図版01 調査地点鳥瞰

図版02 1. 調査地点遠景 2. 南西からみた調査地点

図版03 1. A調査区西壁 2. 本調査区西壁（北東から）
3. トレンチ西壁（北東から）

図版04 1. 石鎚出土状況 2. 陶器片出土状況
3. 青磁片出土状況

図版05 1. P01検出状況 2. P01完掘状況
3. 柱穴状遺構検出状況

図版06 1. SX01配石検出状況 2. SX01配石完掘状況
3. 実測石器類

図版07 1. 実測土器類（1） 2. 実測土器類（2）
3. 実測土器類（3）

図版08 1. 発掘風景（北から） 2. 調査区完掘状況（北から）
3. 発掘調査参加作業員

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

島根県鹿足郡日原町大字柳村の柳地区に所在する本遺跡は、平成11年度に実施された鹿足地区中山間総合整備事業に伴う試掘調査で明らかになったものである。その試掘調査は、平成11年10月20日から同年11月9日まで実施し、4箇所のうちの1地点（8 m²）で遺物の存在が確認され、地名が柿木川（かきのきだ）と呼称されていることから命名したものである。

当調査では、第3層の灰褐色土の上面から、中世時代の陶器片や青磁片などが十数点出土し、同層の下面から黒曜石・石鐵・石器剥片などの石器類20点が出上した。また、5層橙褐色粘質土からも陶磁器類や石器類が出土した。しかし、試掘調査という狭い調査範囲からでは遺跡の性格は明らかにできなかった。

第2節 発掘調査の経過

上記のとおり、本地点が遺跡であるということが確認されたので、平成11年度に本格調査を実施することにした。

まず平成12年2月7日付で、文化庁宛に埋蔵文化財発掘調査の書類を提出し、調査は同年2月8日から行った。調査中には、山口大学人文学部の中村友博教授と匹見町教育委員会の渡辺千代氏が2月24日来跡され、その時に調査区の設定や出土遺物についての指導を受けた。さらに、3月6日には島根県教育委員会文化財課の守岡正司主事が発掘調査指導に来町された。なお、現地調査は同年の3月27日に無事終えたのであった。

(中井 将胤)



本調査区発掘風景

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

本遺跡が所在する日原町は、島根県の西端に位置し、津和野町・六日市町・柿木村・匹見町・益田市の5市町村に隣接した山間地域に存在する（第1図）。当町の最高地は、六日市・匹見町と稜線を分かつ標高1263mの安蔵寺山々頂とし、最低地は町内を南北に貫流する高津川の明神淵（青原地内）の標高40m地点である。この高低差は1,223mあり、匹見町の1,246mに次ぐ県下第二位のものである。当町は東西17.2km、南北14.7km、周囲73.6kmを測り、総面積は167.72km²におよぶが、その90%は山林で稻作を中心とした耕地は僅か2%にすぎない。しかもこれらは山間に点在しているため、生産性の低い渓谷型農業地帯の形成を余儀なくされている。



第1図 位置図

本遺跡はこうした立地下にあり、日原町の北西端の高津川支流である柳川の源流付近に位置し、柳村集落から少し外れた標高157m地点の狭小山間地に所在する。本遺跡は、島根県鹿足郡日原町大字柳村736番地外に在り、その地点を「柿木田」と呼称されているため、その地名をもって命名した。

（中井 将胤）

第2節 歴史的環境

日原町内において、原始古代遺跡の存在が確認されたのは、昭和20年代末期に日原市街地の高津川右岸の岩場上において、識者による表面採取方法により土器や石器を収拾したのが初めてである。しかし、その後発掘調査や確認された例はなく、僅かに井戸掘り作業中に発見された土器片や、偶然見つかった土器片や石器数点が確認された程度で、本町が考古学的未開発地域であることは認めざるえない。

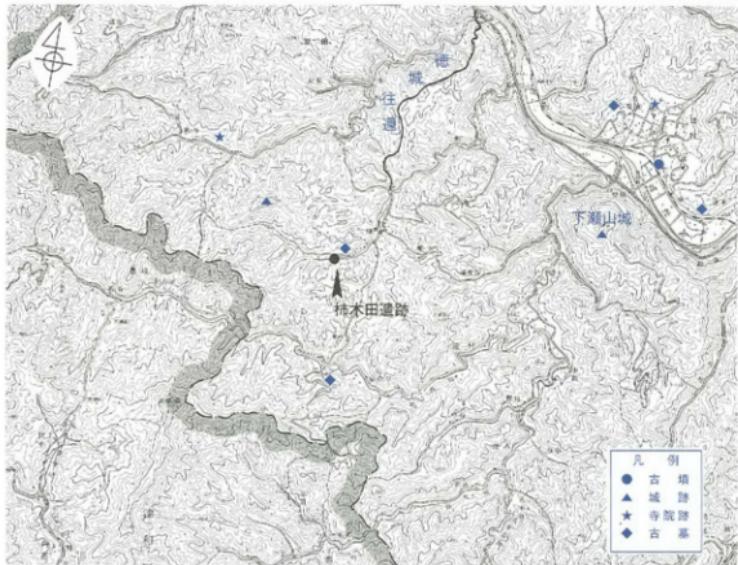
平安・鎌倉時代には、益田市西部に長野荘や益田荘の荘園が存在し、これらに近い当遺跡周辺地域はその影響下にあった。そのため、開発が遅かったと伝わるのをごう能瀬郷の中でも、比較的早期に開発された地域であると考えられる。当遺跡に隣接する集落には、貞觀年間（859～）勧請と云われる日原町最古の神社や、寛平8年（896）勧請と記した神社の鎮座などからも、この地域の開発の古さを窺うことができるといえる。

この地域が、歴史上確かなものとして表れてくるのは、弘安5年(1282)吉見氏入部以後である(第2図)。吉見氏は津和野に三本松城を築き、300年間の長きにわたりこの地方を治めていた。時は戦国時代であり、そのため吉見氏は、能濃郷の開発と周辺地域に多くの山城や砦を築き外敵からの侵入に備えた。その一つとして、本遺跡の東側に下瀬山城を構築し、また北西側にその支城として能登呂山城を構えていた。下瀬山城の峻険な山容は、そのままで要害となり、山上に構築された堅固な城塞は、天文の役(1551~)時において、陶・益田方の猛攻にもゆるぐことはなかった。一方能登呂山城は同役時の激戦地であり、この地域が中世期、戦乱の渦中に晒されていたことは確かであろう。そして、これら戦国期を物語っているかのように、宝篋印塔や五輪塔が多く点在しているのである。

藩政時代になると、柳地区中央を当時の主要往還「山陰道」が縱貫し、近くの笹ヶ谷銅山や他に通ずる要路とも交わる交通の要地であった。現在、この往還は道路改良工事によって一変しているが、徳城畠を中心に当時の街道(約4km)が、町指定文化財(史跡)として保存維持されている。また、この地域は紙漉きの盛んな所でもあった。延享年間の頃、地元蔵方と庄屋との間で起こった私怨による争いは、上納紙取り扱い上の騒動に至り、津和野藩政史上例の無い大事件となった。そのため蔵方親子三人は逮捕入牢、蔵方親子に同情し、救済に尽力した大目付の働きもむなしく、遂に城下引回しのうえ斬罪になったという、当時としてはこの地域最大の哀話として現代に伝えられている。

また、古い六調子の神楽も伝承されており、柳神楽として県の無形文化財に指定され、永正3年(1506)徹叟作の鬼面や神楽衣装も民俗資料として県の文化財に指定されている。

(山田 順之)



第2図 位置と周辺の遺跡分布図

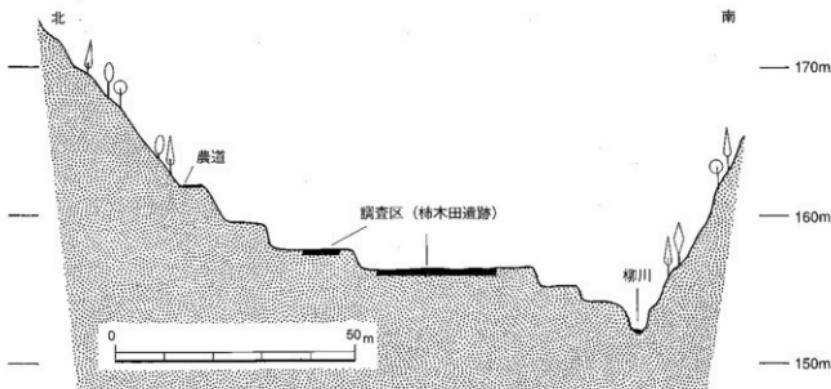
第3章 調査の概要

第1節 遺跡の地形的立地

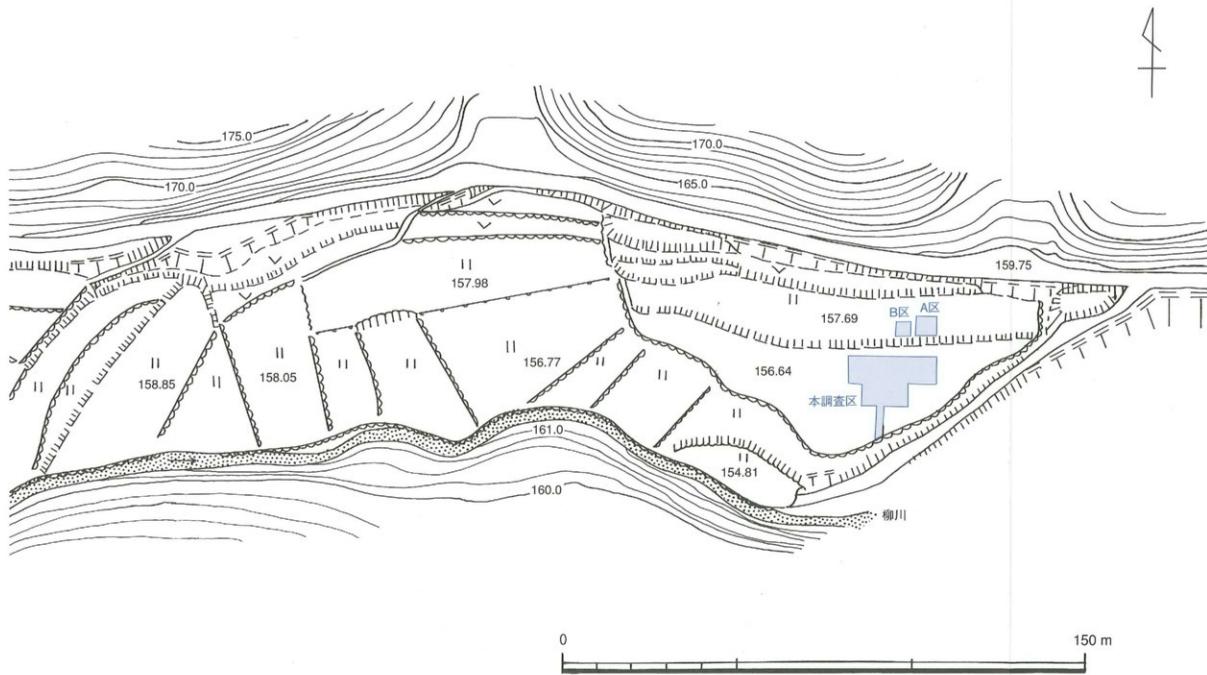
本遺跡が所在する日原町の地質をみると、匹見町境の大山谷から町中央晩越を通り、津和野町境倉地に伸びる線の南側を中生代白亜紀の匹見層群、同線の北側に広がる非変成中古成層の鹿足群層は砂岩、チャートを挟み頁岩を基盤として構成されている。本遺跡はこの鹿足層群上に載り、遺跡周辺は貴重な地下資源に恵まれ、西側に笠ヶ谷銅山、東側の日原地区には日原鉱山があって、これらは幕府の直轄地天領として古くから知られ、大森銀山支配下にあった。その他周辺鹿足層郡上には、瀧元鉱山・鹿谷鉱山・笠ヶ瀬鉱山（須川谷）・本光寺鉱山・青原鉱山・新金山鉱山（鹿谷）等、多くの鉱山が存在し採掘されていた。

本町の地形は、津和野から倉地・越原・枕瀬・日原・須川・須川谷に伸びる津和野断層線に沿い、その南側に連なる標高400m以上の険しい高地地域と、北側の日本海方面のなだらかな山容を見せる低地域から成り、本遺跡は北側低地域上にある。この地域は、相撲ヶ原背後の赤石山山系と、津和野町境に聳える胡麻ヶ岳山系からなり、本遺跡は胡麻ヶ岳山系の下瀬山支脈と徳城支脈の間を緩流する柳川の上流部に位置する。周辺には、胡麻ヶ岳の561mを除いて、他には500m以上の高山は無く、僅かに岡田山297.9m・高郷山340m・下瀬山316.9mを見る程度である。

本遺跡は、柳川上流に忽然と開けた地形で、総面積4.59km²を測る柳村地区の西端に位置し、周りを三渡・程彼・宿ノ谷・大木・鹿谷・小瀬の6集落に取巻かれた地域である。なお本遺跡は、柳川の原流付近に位置し、北側と南側に標高200m前後の山が聳え、谷添いに耕作地が狭長に造られた水田耕作地になっている（第3図・図版2-1～2-2）。



第3図 地形断面図



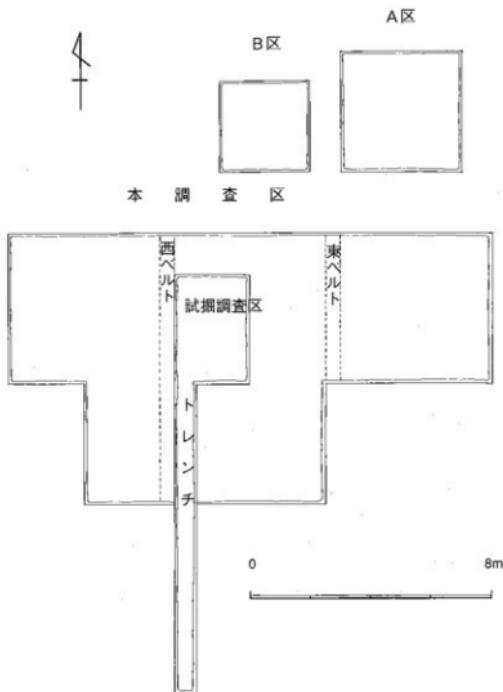
第4図 遺跡配置図

第2節 調査区設定

平成11年度に実施した試掘調査では、狭長の水田のほぼ中央部に $2\text{m} \times 2\text{m}$ の方形区を4箇所設けて調査を行った。このうち東端部の1箇所のみ石鎚や陶磁器片などの遺物が出土したため、遺跡であることが判明したのであった。その地点からは遺構等は確認されなかつたが、今回の本調査区は、その地点域に設けることにした（第4図・図版8-2）。

まず最初に、試掘調査区を設けた地点を中心に $5\text{m} \times 5\text{m}$ の方形区を設け、幅50cmを測るベルトを残し、さらに東西側にそれぞれ $5\text{m} \times 5\text{m}$ の方形区を設けた。調査面積は75m²を測る区形を設定し、この区画を本調査区ということにした。そして一方では、遺跡の広がりを捉えるため、北側上段部においては、 $3\text{m} \times 3\text{m}$ の方形区をA区、 $4\text{m} \times 4\text{m}$ の方形区をB区とし、2ヶ所を設けることにした。

その後、本調査区の南側に幅70cmのトレンチを設け、水田端部まで延ばすこととした。さらに、第3層まで進掘した段階で遺物・遺構の共伴がみられたので、トレンチの東側に $5\text{m} \times 4\text{m}$ 、西側に $4\text{m} \times 3\text{m}$ のものを拡張した。なお、トレンチにおいては古い段丘が確認できるまで掘り下げることにした。（第5図）



第5図 調査地区名図

第3節 層序と層位

1. A・B区の層序状況

これらの調査区は、本調査区と称名する調査区の3層面まで掘削した段階で、その文化層の広がりを確認するために、北側に設けたものである。なお、その北側の現地表面標高は凡そ157,8mあって、本

調査区の標高表面よりは1m前後高い位置にある。

それらの基本的な層序は、1層の水田耕作土、2層の客土（茶褐色砂質土）、3層の茶褐色土、4層の淡茶褐色土、5層の灰褐色粘質土、6層の淡茶褐色土の順で堆積する（第6図・図版3-1）。

まず表土の1層は、暗灰色をした粘質性の水田耕作土である。層厚は10cm～14cmを測って、A・B調査区ともほぼ同じ厚さである。つぎの2層は、砂質性の客土（床土）で、1～2cm大の砂石を多く含んでいる。層厚は4～6cmを測って比較的水平に堆積する。3層は、酸化鉄が含浸した茶褐色土で2cm大の砂石を多く含む。層厚は5cm～20cmを測り、総体的には山裾側の北面に向かって薄層であった。おそらく水田作成時に削平等によって生じたものと考える。4層は淡茶褐色土で層厚は8cm～20cmを測り、やや砂質性である。本層の下位面からは、土師質土器の皿が1点出土している。

5層は灰褐色粘質土で、層厚は8cm前後を測り調査区の中心付近で尖滅している。6層は淡茶褐色土で、層厚は10cmを測り、5層と同様に山裾側の北面に向かって尖滅している。おそらく本層は、上層と色調から分層としたが、両層とも土質からみても旧水田の耕作土であると考える。

4層から土師器片が一点検出されているものの、遺構などは確認することが出来ず、遺跡の可能性は無いと考えられた。

2. 本調査区の層序状況

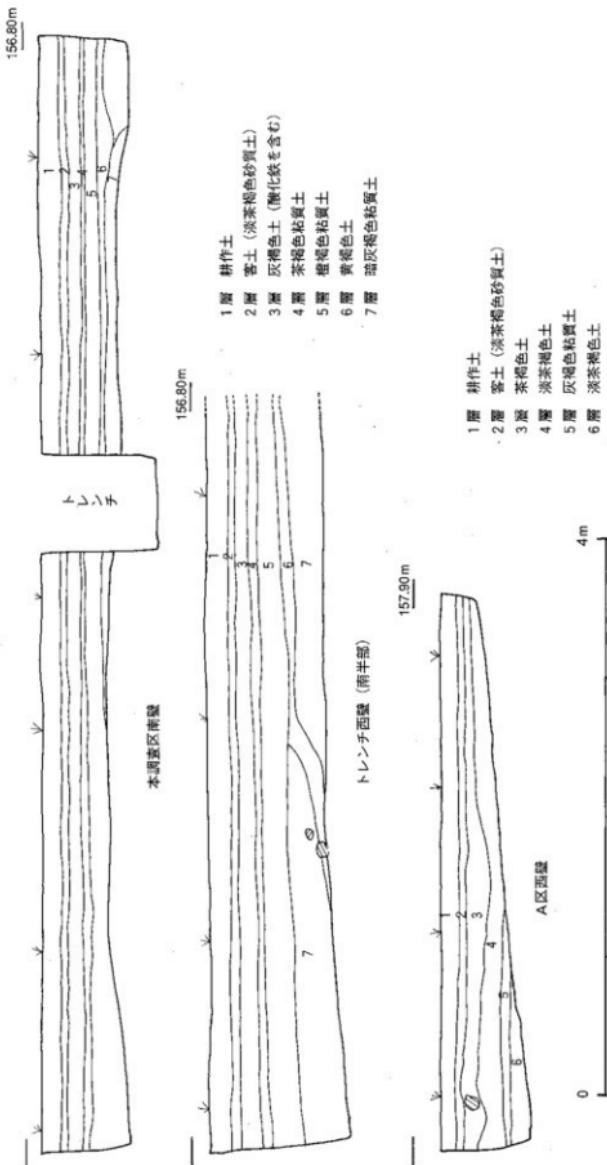
本層の基準的層序は、A・B区の層序とは少し異なり、1層の水田耕作土、2層の客土（淡茶褐色砂質土）、3層の灰褐色土、4層の茶褐色粘質土、5層の橙褐色粘質土、6層黄褐色土、7層の暗灰褐色粘質土の順で堆積する（第6図・図版3-2）。

1層と2層については、前項の層序とほとんど違いはない。つぎの3層は、灰褐色土で1cm大の砂利石を多く含んでいた。層厚は、とくに南側においては22cmを測って厚く、逆に北側に向かって徐々に薄層となり、調査区の北側から1mのところで完全に消滅していた。この上位面からは、主に15世紀の陶磁器や18・19世紀の陶器片が約50点出土している。一方、中・下位面からは弥生・古墳時代の土器片が数点と、縄文時代の石器類が50点余り出土している。また、この下位面から15世紀の陶磁器が20点出土している。つぎの4層は、茶褐色土で層厚は4cmを測って平均的に堆積するが、北側に向かって徐々に薄層となり3層と同じ位置で消滅している。出土遺物は皆無であった。

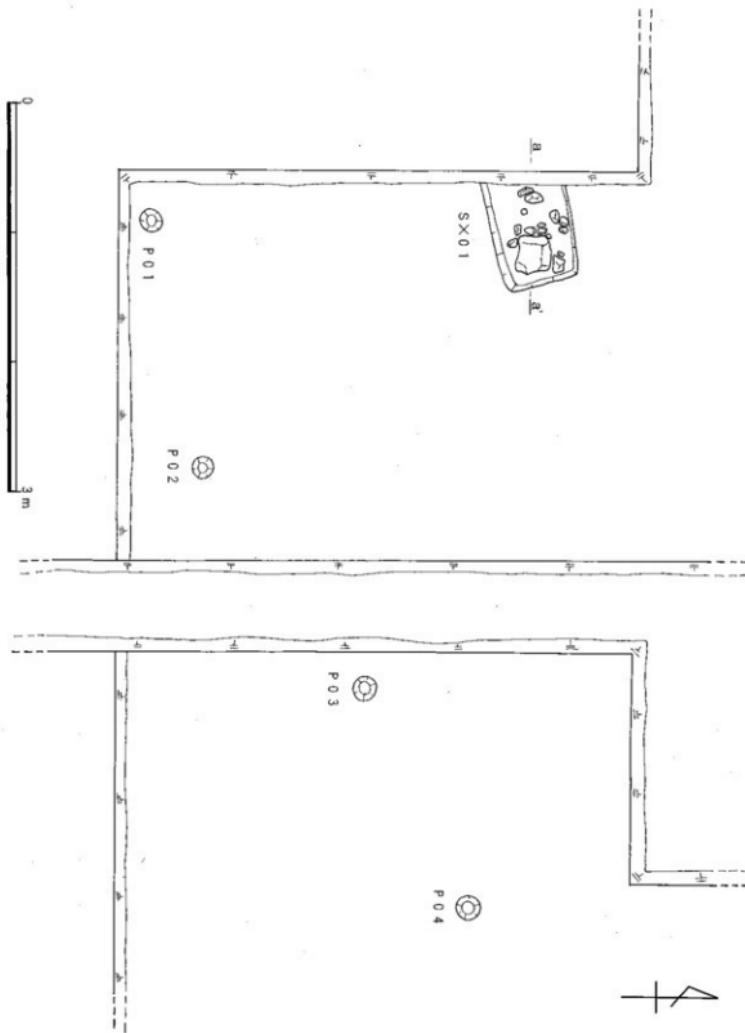
5層については、橙褐色の粘質性である。層厚は、北側においては40cmを測って厚いが、南側においては20cmぐらいに徐々に薄層になる。出土遺物は、陶磁器類が数十点、石器と剥片が十数点出土している。また、下位面の6層との層界に柱穴状（P01～04）の遺構と（第8図・図版5-1～5-3）、配石遺構（S X01）1基（第9・図版6-1～6-2）が検出されている。

つぎの6層についてであるが、当初、本層以下には文化層は存在しないものと想像し、本調査区の中央付近から南側に向かってトレンチを設定し、下位層の状況を把握するために掘削することにした（第6図・図版3-3）。以下、下位層の状況については該当のトレンチを中心に記述することにする。その6層は、黄褐色した粘質土で、層状はよく縮まって粒子は緻密で礫石などはほとんどみられなかった。この層からは、遺物等の存在は確認されなかった。7層は暗灰褐色土で層厚は30～40cmを測り、安山岩や黒耀石の剥片が数点出土した。

第6図 土層図



第7図 造構指示図



第4節 遺構

1. はじめに

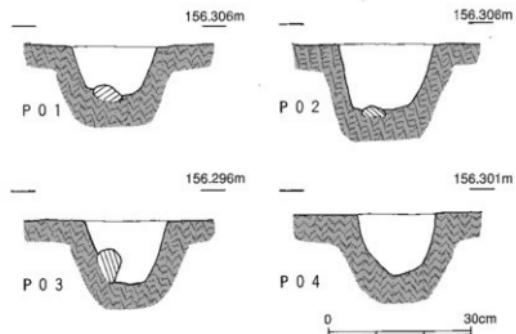
本節で述べる遺構については、A・B区では検出されていないので、ここで報告するものは全て本調査区におけるものである。また、これら検出された遺構について、その形状からピット状のものをP、配石遺構状のものをS Xと略号することとした（第8、9図・図版5、6）。

2. ピットと配石遺構

ピット

ピットと称した柱穴状のものは、4穴検出された（第8図・図版5-1～5-3）。これらのピットは径20cm～22cmを測るもので、検出面は5層の橙褐色粘質土と6層の黄褐色土の層界面に確認されており、4穴すべてが連結するものであると考えられた。柱穴の深さについては、P01が10cm、P02が

12.5cm、P03が13cm、P04が14cmを測る。坑内の埋土は灰褐色土で僅かに茶褐色土が嵌入している。また、P01・02・03の底部には河原石が置かれていた。



第8図 遺構断面図（ピット）

代の陶磁器片が多く出土していることから、その時代の建物跡に属する柱穴遺構であると推定される。

また、これらのピットは調査区の南側で検出されたが、在穴する調査区の周辺を拡張していないため、これらに連結すると思われるピットの確認や、どのような建物の柱穴であったかについては判断できなかった。しかし、遺構面が比較的しっかりとし

ていること、ピット周辺には、近世

配石遺構

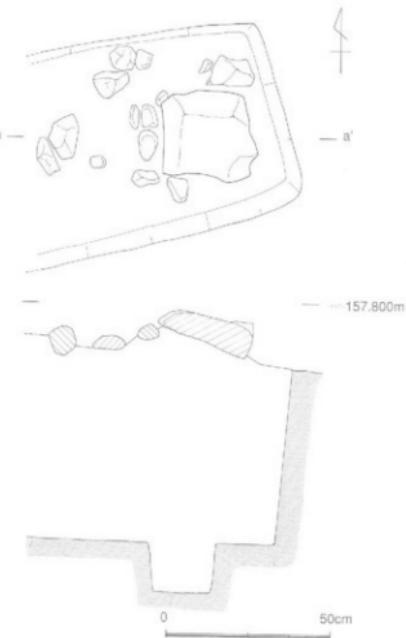
S Xと略号する配石遺構は、1坑のみでピットと称した遺構と同様、5層と6層との層界面に検出された（第9図・図版6-1～6-2）。この配石遺構は、東端に長径40cmを測る大石を15～20cm大の河原石で取り囲み、西側にも数石の石を配石したもので、これらの配石は下部面を埋め戻した後、平坦面に置いた状態であった。

層界面の遺構でみていくと、ほぼ長方形の形を呈しており、その長辺は75cm・短辺は60cmであった。しかし、設定した調査区の境界で確認されたため遺構の全体を捉えることはできなかった。坑内を覆う埋土は、橙褐色粘質土で若干灰褐色土が嵌入していた。坑高は55cmを測り、ほぼ垂直に掘られており、底部の一部に円柱状で深さ15cmに掘られていた。それが何を意味するのか判断することはできな

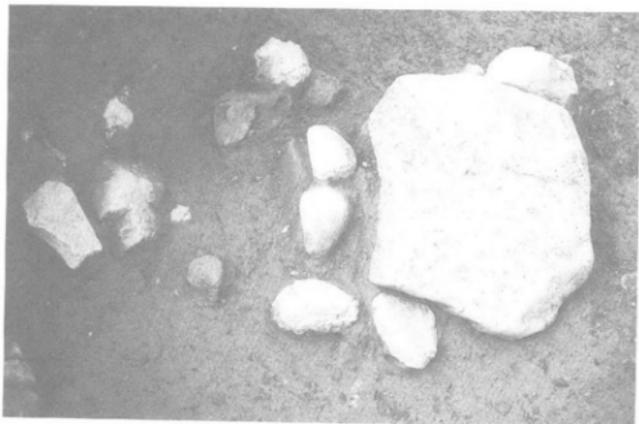
かった。

遺構内において遺物等は検出できなかったが、検出層から判断してピット状遺構と同時代であると想定される。なお、遺構面と同層から陶磁器片が数多く出土していることから、江戸時代の遺構ではないかと思われた。

(中井 将胤)



第9図 S X01配石遺構図



第4章 出土遺物

第1節 はじめに

本遺跡での出土遺物は、総数167点であった(第10図)。これを地区別にみると、本調査区西側20%, 中央70%, 東側10%の割合で出土した。A調査区においては陶器片が10点で、B調査区からの出土遺物は無かった。また種類においては、石器類61点、土器類40点、陶磁器類66点となる。そして、これらを出土層からみると、陶磁器類は3層の灰褐色土に多く、土器及び石器類は主に3層下面と5層の橙褐色粘質土であった。しかし、出土地によっては縄文時代の石器より、中世の陶磁器が下層から出土する場合もあり、水田開発等によって搅乱されていることは否定できない。これらの出土遺物は、すべて平面的位置を押さえるとともに、垂直位置も実測して取り上げたものである。

本報告書では、とくに特徴のあるいは形態的にみて、捉えやすいと判断したものを抽出して、以下みていくことにする(第11, 12, 13図・第1, 2, 3表)。

(中井 将胤)

第2節 実測遺物

1. 土器類

1は須恵器である。杯の蓋部片で、外面に回転ナデ痕が見られる。2は備前焼の擂鉢と思われ、大型の破片で、内面は磨滅している。

3, 4, 10, 13は肥前系磁器の碗である。3, 4, 10は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部へと至る。10は外面に二重綱目文が描かれている。これらはいずれも18世紀頃のものと思われる。15は肥前系磁器の皿、17は(肥前系)磁器の杯である。

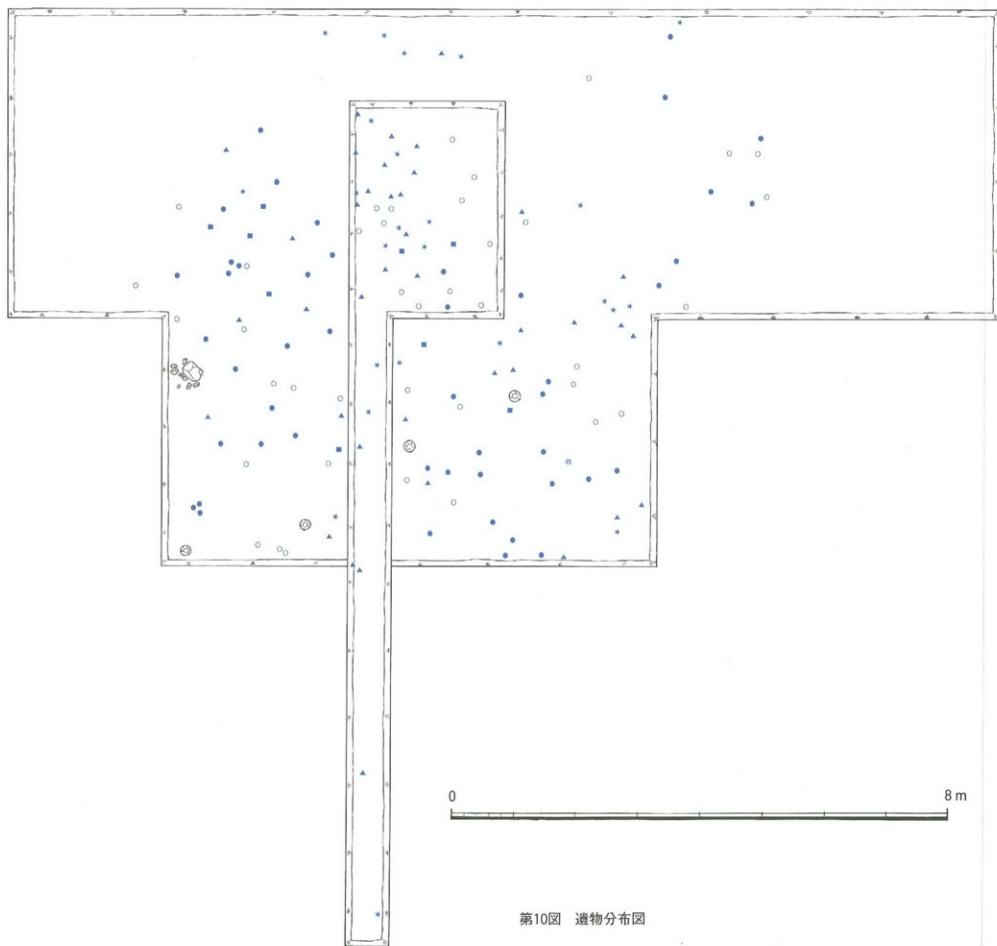
5, 6, 11, 16, 19, 20は施釉陶器の碗である。5は口縁端部をゆるく外反させ、内外に黄褐色の釉を掛ける。11は逆「ハ」字形に開いた浅い形態の碗である。16は低部片で、高台端部を除き灰白色の釉が掛かる。19は高く削り出された「ハ」の字形に開く高台をもつ。釉は灰白色を呈し、内面と外面の体部に施される。20は暗褐色の釉が掛けられ、内面底部には窯道具痕が残る。

7, 8, 18は施釉陶器の鉢である。9の頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内傾し、鳥嘴状をなす。釉は暗茶色で、内面と外面体部上半に掛けられる。12は体部が外反しながら立ち上がり、上半から内湾して口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、外面に四線を巡らせる。14は壺の体部と思われる。全体的に薄く作られ、内外に灰色の釉が掛かる。

21~26は中国製陶磁器である。21, 24は染付である。21は碗で、口縁端部を外反させる。小野B群に属し、16世紀前半のものと思われる。24は皿。口縁は内湾し、内面底部の釉を輪状にかき取るものと思われる。胎土は陶器質。16世紀後半のものと思われる。

第1表 出土遺物観察表1（土器類）

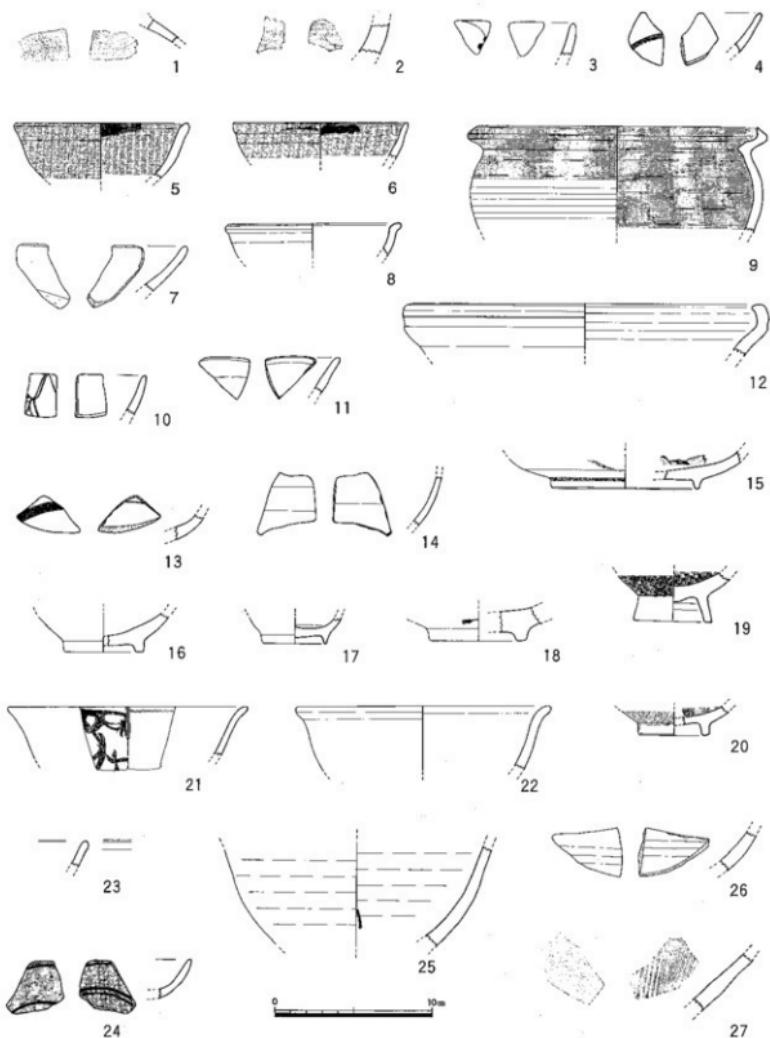
押岡 番号	出 土 地 点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土 焼成	備考
			口径	底径	器高				
1	トレンチ 5層	須恵器 蓋				ナデ	外：鈍い赤褐色 内：灰褐色	密 良好	
2	本調 3層上	備前 描鉢				ナデ	内・外：灰色	密 良好	
3	本調 3層上	伊万里系 碗				外：植物文様	内・外：青白色 底：灰白色 文：藍色	微密 良好	施釉 近世前葉
4	本調 3層下	伊万里系 碗				外：幅の一重線文様	内・外：青白色 地：青灰色	微密 良好	施釉 江戸前葉
5	本調 3層上	近代陶器 碗	11.0			体部は内湾。端部直下で 外面にわずかに折れ曲がり肥厚気味。端部は丸い	内・外：青白色 地：青灰色	微密 良好	施釉 江戸前葉
6	本調 3層上	近代陶器 碗	11.0			体部はやや内湾気味、端部は丸い	内・外：オリーブ灰・青灰色 地：灰白色	微密 良好	施釉 江戸前葉
7	本調 3層下	近代陶器 碗				体部は逆「ハ」字状(内：清 氣味)に開く。端部は丸い	内外：鈍い黄橙 色	密 良好	外：スズ付着(下部) 江戸～
8	本調 3層下	近代陶器 碗	11.0			体部は内湾し、口縁部付 近で外側に折れ曲がる	内外：鈍い黄橙 色	密 良好	施釉 近世
9	本調 3層下	近代陶器 碗	18.6			体部は扇球形、頭部は 「L」字状で扁曲、端部 は内傾し鳥嘴状。 回転ヨコナデ	内外：暗褐色 地：灰褐色	微密 良好	施釉 近世
10	トレンチ 3層下	伊万里系 碗				体部は内湾、端部は丸い	内外：灰白色 文：藍色	密 良好	施釉 18世紀
11	本調 3層下	近代陶器 碗				体部は外傾、口縁部付近 でつまみ出し。	内外：浅黄橙色	密 良好	施釉
12	本調 3層上	近代陶器 鉢	22.6			体部は外反する。途中で 内湾して端部へと続 く、端部は肥厚。 外：幅広の溝の上に一条凹線	内外：オリーブ 黄色 地：灰褐色	密 良好	間入 施釉
13	F区 3層上	伊万里系 碗	11.0			体部は内湾。外は幅広の 一重線。 内は細い一重線。	内外：青灰色 地：灰白色	微密 良好	施釉 江戸期
14	トレンチ 3層下	近代陶器 壺				薄手、体部は内湾 内外：回転ナデ	内外：灰橙色	微密 良好	施釉
15	本調 3層下	伊万里系 皿	22.6			高台付皿、高台部は削り 出し、低と体部の境目に 付く。低～体部へ内湾す る。内外：風景文様	内外：青灰色 地：灰白色 文：暗藍色	微密 良好	施釉 盤付部分は除く
16	本調 3層上	近代陶器 碗	高台 5.0			高台付碗。高台部は削り 出して安定感がある。低 部は内輪しながら体部へ と続く。	内外：淡青灰色 地：灰白色	微密 良好	施釉
17	本調 3層下	近代陶器 碗	高台 4.0			高台付碗。高台部は削り 出し、脣部分は尖り気味 で体部との境目に付く。	内外：灰白色	微密 良好	施釉 江戸～
18	トレンチ 3層下	近代陶器 碗	高台 6.0			高台付碗。厚手。高台部 は削り出しで幅広、低 目でがっちり型	内外：灰白色	微密 良好	施釉 江戸～
19	本調 3層下	近代陶器 碗	高台 4.8			高台付碗。高台部はやや末 広がりで高さがあり、しつ かりとしている。底から体 部へ内湾している。	内外：灰白色 地：浅黄色	密 良好	施釉 江戸～



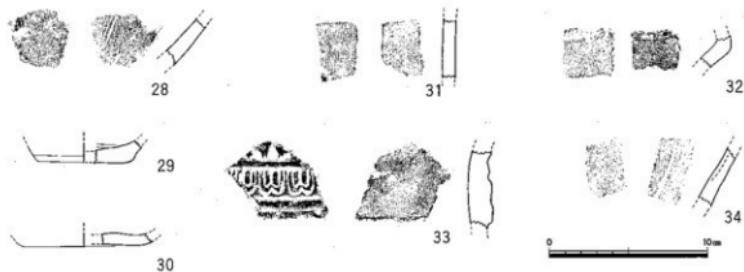
第10図 遺物分布図

第2表 出土遺物観察表2（土器類）

排図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土焼成	備考
			口径	低径	器高				
20	本調5層	近代陶器碗	高台 4.6			高台付碗高台部はしっかりと底と体部の境目に付く。見込部分に胎土目の跡	内外：暗褐色 地：鈍い黄橙色	微密 良好	施釉。高台部の外面一部と豊付部分の内部は除く。
21	本調3層上	中国染付碗		15.0		ナデ		密 良好	
22	本調3層下	中国染付碗	16.0			外：植物文様	内・外：青白色 地：灰白色 文：藍色	微密 良好	施釉 近世前葉
23	本調3層下	中国青磁碗				外：幅の一重線文様		微密 良好	
24	本調3層上	中国陶染付皿				体部は内湾、端部直下で外面にわずかに折れ曲がり肥厚氣味。端部は丸い	内外：オリーブ灰・青灰色 地：灰白色	微密 良好	施釉 近世
25	本調3層下	中国青磁碗				体部はやや内湾氣味、端部は丸い		微密 良好	
26	本調3層下	中国青磁碗				体部は逆「ハ」字状(内：湾氣味)に聞く。端部は丸い	灰黃褐色	密 良好	外：スヌ付着(下部) 江戸～
27	本調3層下	備前陶器揉鉢				体部は内湾し、口縁部付近で外側に折れ曲がる		密 良好	
28	本調3層下	土師質擂鉢	5.6			体部は扇球形、頭部は「く」字状で屈曲、端部は内傾し鳥嘴狀。	暗黃褐色	2mm以下の砂粒を含む 普通	
29	本調3層下	土師質皿				底部はわずかに上底。外：底部は回転糸切り痕 内：回転ナデ			
30	本調3層下	土師質皿	7.0			体部は直立的に立ち上がる。外：ハケメ 内：ハケのちナデ	浅黄橙色	2mm以下の砂粒を含む 良好	中世期
31	本調3層下	弥生土器甕				体部は直立的に立ち上がる。外：ハケメ 内：ハケのちナデ			
32	本調5層	瓦質鉢				体部は大きく外傾する。口縁部付近で内側に屈曲する。内外：ナデ	灰黄色	密 良好	14～15世紀
33	本調3層上	瓦質風呂				外：蓮弁文様			
34	本調3層下	瓦質揉鉢				体部は直立的に聞きながら立ち上がる。外：体部はタテハケのクシ状工具による。内：ナデ	黄褐色	3mm以下の砂粒を含む 普通	



第11図 土器類実測図(1)



第12図 土器類実測図(2)

22, 23, 25, 26は青磁の碗である。22は口縁部を外反させ、灰緑色の釉が厚く掛かる。23, 25は大宰府分類のI類に属するものである。25は内面にヘラ彫りによる文様を施す。12世紀中頃～13世紀中頃と思われる。

27は肥前系陶器の擂鉢で、内面には擂面が密につけられている。28は土師質土器の擂鉢である。内面の擂目は磨滅が激しい。29, 30は土師質土器の皿である。ともに磨滅しているが、30の外底部には回転糸切り痕が認められる。

31は弥生土器の甕の胴部片かと思われる。外面タテハケ、内面ナナメ方向のケズリのちタテハケを施す。中期後半の可能性がある。

32～34は瓦質土器である。32は鉢で、口縁端部を断面「く」の字形に屈曲させる。内面はヨコハケ、外側はヨコナデによる調整を施す。33は火鉢の胴部下半身・風呂部分片と思われる。胎土は1mm前後の砂粒を多く含んでおり、焼成はやや軟質である。34は擂鉢と思われ、内面にしっかりとした擂目が刻まれている。

(田中 義昭・細田 美樹)

2. 石器類

1は安山岩製の凹基式石鎌である。両面からの丁寧な剥離により整形されている。2, 3は黒曜石製の石鎌である。両面ともに丁寧な調整が施される。4は黒曜石製の凹基式石鎌である。背面左側の辺は腹面からのみ打撃により調整される。背面右側の辺は腹面、背面から交互に打撃が加えられている。

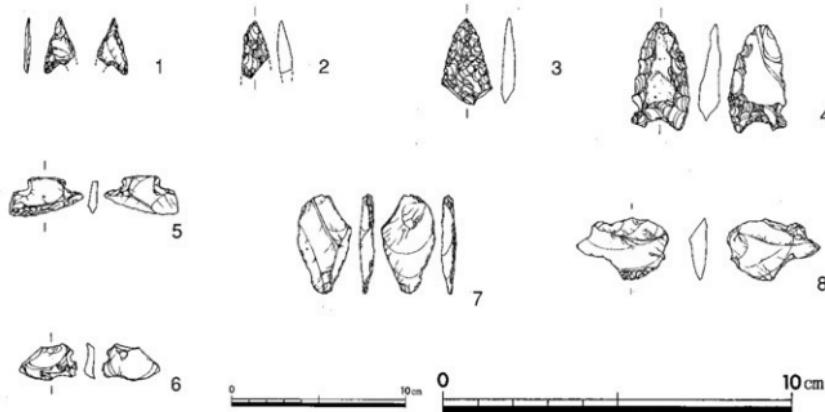
5は安山岩製石匙で、風化が進み灰白色である。背面、腹面の区別が不明で、片面からの打撃により刃部が整形される。6は剥片で、石器整形のための調整時にできた剥片と思われる。7, 8は安山岩製の剥片である。7はやや縦長の剥片の長辺を刃として使用した形跡がある。8は不定形で刃部に調整を施している。

これら石器類についての時代判定は、土器類を伴っていないため正確な所属期は不明であるが、大きさや調整痕などから判断して、縄文時代のものである可能性が高い。

(上原 香里)

第3表 出土遺物観察表3（石器類）

拂団 番号	出 土 地 点	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	備 考
			口徑	低径	器高		
1 5	本 調 層	石 鎚	3.2	1.7	0.3	凹基式石鎚。両面からの丁寧な削離により整形。	石材 安山岩
2	本 調 3層下	石 鎚	1.6	0.8	0.4	両面とも丁寧な調整	石材 黒曜岩
3	本 調 3層下	石 鎚	2.4	1.4	0.4	両面とも丁寧な調整	石材 黒曜岩
4	トレンチ 5層	石 鎚	3.0	1.6	0.6	凹基式石鎚。背面左側の辺は腹面からのみ打撃により調整される。背面右側の辺は腹面・背面から交互に打撃が加えられる。	石材 黒曜岩
5	本 調 3層下	石 匙 (横 形)	2.2	4.2	0.5	風化が進み全体に灰白色。背面、腹面の区別は不明。片面からの打撃により刃部が整形。	石材 安山岩
6	本 調 3層下	剥 片 (横 長)	1.1	1.6	0.3	石器整形のための調整時にできた剥片。	石材 チャート
7	本 調 3層下 (使用痕)	剥 片	5.6	3.0	0.8	やや縦長の剥片の長辺を刃として使用。	石材 安山岩
8	本 調 3層下	剥 片 (2次加工)	3.5	5.2	1.0	不定形の剥片。刃部に調整を施す。	石材 安山岩



1、5、7、8-1 : 0

2、3、4、6-2 : 0

第13図 石器類実測図

第5章 小 結

本遺跡は、平成11年度の試掘調査で所在が確認されたものである。本調査は、開発に伴う緊急の調査であったため、調査日数も少なく、また掘削面積も狭かったということもあって、詳細に全貌を明らかにし検討することはできなかった。そのことを最初に断わった上で、以下気付いた点を記したい。

まず本遺跡は、縄文・弥生・古代・中世・近世の5つの文化遺物が確認された。そのうち縄文時代のものは、剥片や石器といった石器のみという結果から時期の特定は困難であった。剥片等が多く出土し、明らかに石器をこの近辺で製作していたと思われたが、土器が一片も確認されていないため、なお年代については確定できず、また、なぜ土器が一片も出土しなかったのかについての結論には至らなかった。

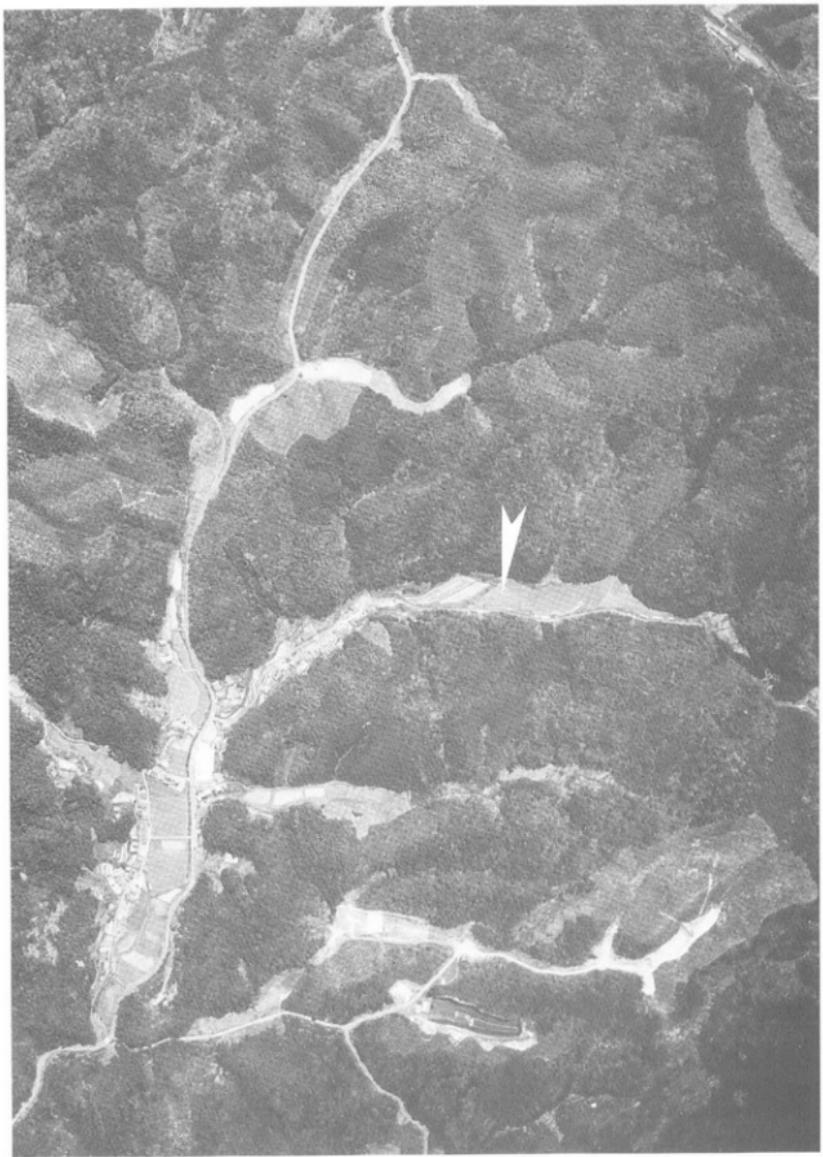
つぎに弥生時代のものであるが、出土した遺物の中でわずか1点しか確認されていないため判断が困難であったが、弥生中期後半のものと考えられる。古代の遺物としては須恵器片1点がある。中世期の遺物としては、土師質の土器や陶磁器などが出土し、そのなかに中国製の青磁も含まれていた。

以上、これら4つの文化遺物は、いずれも遺構を伴ったものではなく、第4章でも記述したが調査区全体が搅乱的様相を呈していたため、それらの時代的生活誌を確認することはできなかった。

最後に近世期については、調査区の南側に多く陶磁器類が出土し、それに伴うピット・土坑状遺構が検出された。比較的遺構面はしっかりしていて、出土遺物から18世紀ごろのものと判断された。ただし、遺構については、調査区の境界に検出されたため、その全貌を確認することはできなかった。おそらくピット状遺構は建物の柱穴と考えられ、土坑は集石墓に属するものであると考えられた。

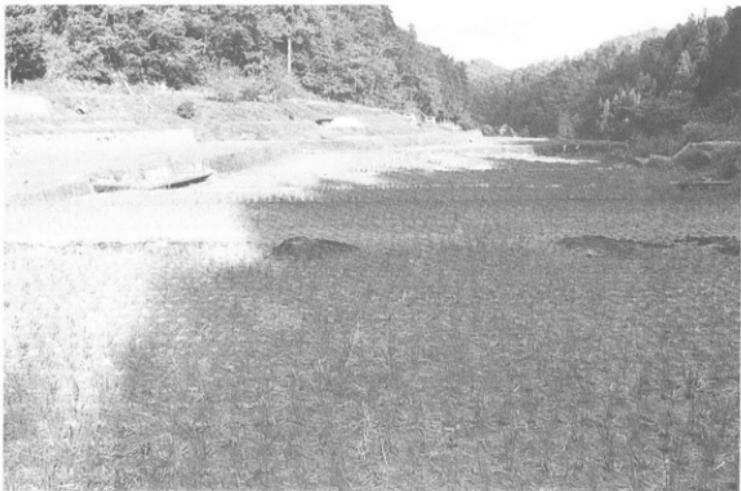
前述したが、この遺跡は縄文から近世期に至るまで継続的に人々が生活していた土地であることが確認できた。しかし、遺物の出土状況が比較的集中していたことや遺構などが皆無であったことから、幾度の水田開発などで削平されたため当時の面影は残されていない状況であった。

(中井 将胤)

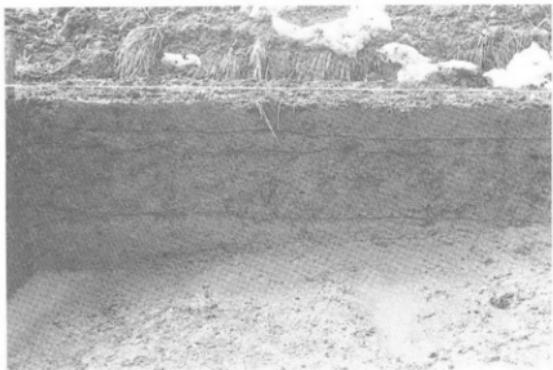




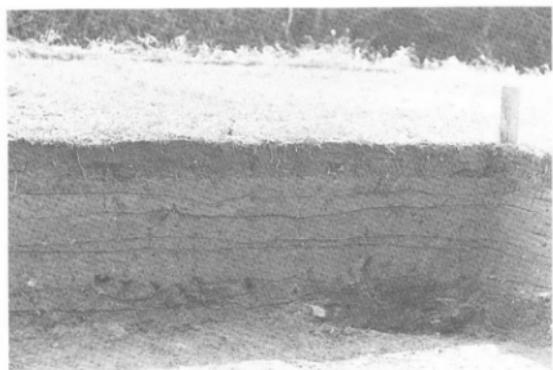
1. 調査地点遠景



2. 南西からみた調査地点



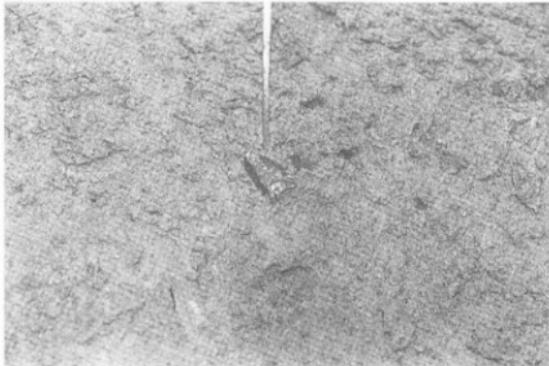
1. A調査区西壁



2. 本調査区西壁 (北東から)



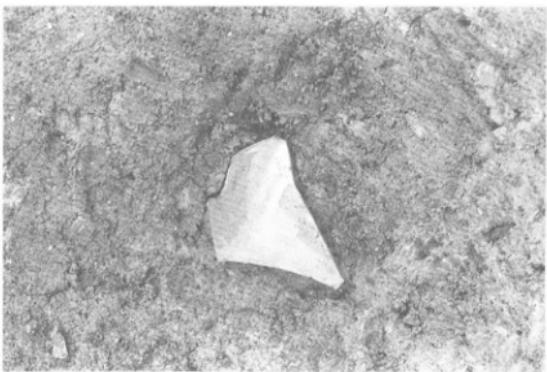
3. トレンチ西壁 (北東から)



1. 石鎚出土狀況



2. 陶器片出土狀況



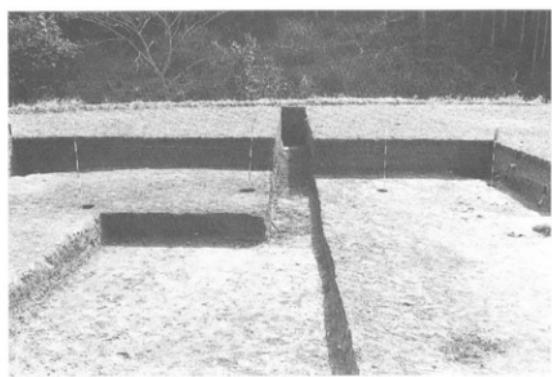
3. 青磁片出土狀況



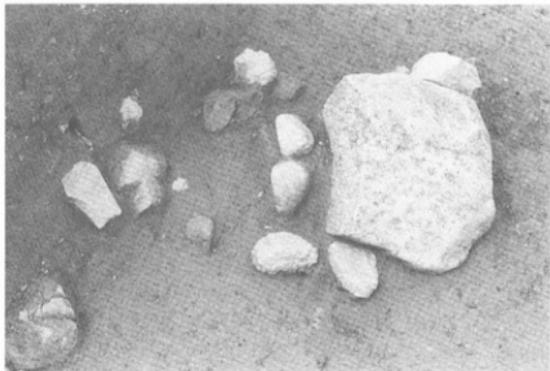
1. P01検出状況



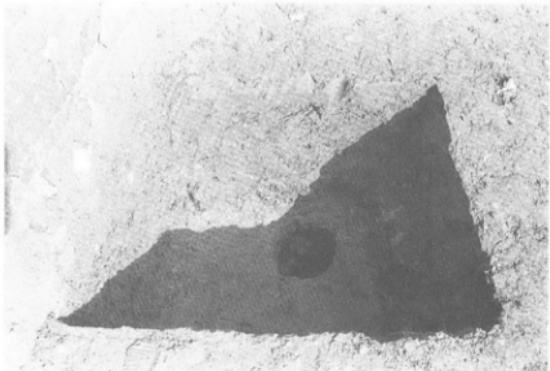
2. P01完掘状況



3. 柱穴状遺構検出状況



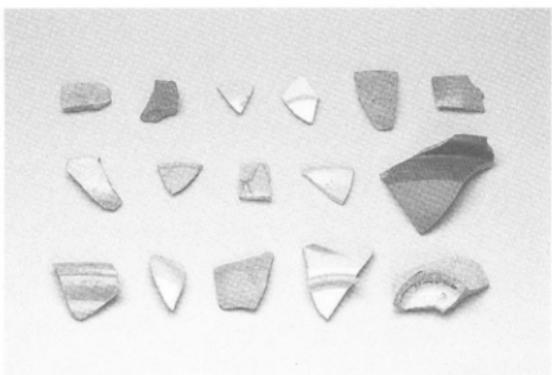
1. S X01配石検出状況



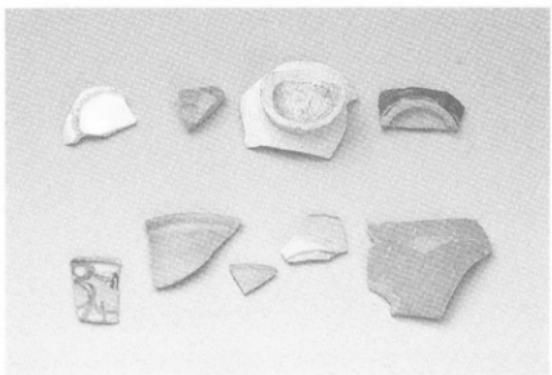
2. S X01配石完掘状況



3. 実測石器類



1. 実測土器類(1)



2. 実測土器類(2)



3. 実測土器類(3)



1. 発掘風景（北から）



2. 調査区完掘状況（北から）



3. 発掘調査参加作業員

平成13年3月23日 印刷
平成13年3月30日 発行

日原町埋蔵文化財調査報告書第1集

柿木田遺跡

発 行 日原町教育委員会
島根県鹿足郡日原町大字日原54-25

印 刷 大村印刷株式会社
山口市大手町3-24 パークビル2階
